

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月6日現在

機関番号：14401
 研究種目：研究活動スタート支援
 研究期間：2011～2012
 課題番号：23820026
 研究課題名（和文） 十六世紀後半のトスカーナ大公国の視覚芸術文化における記憶術からの影響
 研究課題名（英文） The effects of the art of memory on the visual arts of the Grand Duchy of Tuscany in the late sixteenth century
 研究代表者
 桑木野 幸司（KUWAKINO KOJI）
 大阪大学・文学研究科・准教授
 研究者番号：30609441

研究成果の概要（和文）：初期近代に大流行を関した知的的方法論である記憶術が、単なる情報整理技術にとどまらず、同時代の視覚芸術や建築・庭園学においても様々なかたちで応用されていた点を、トスカーナ大公国を中心とした芸術史の展開を置くことで、具体例に即して示すことに成功した。具体的には、アゴスティノー・デル・リッチョの理想庭園構想に記憶術が応用されていたこと、そしてコスマ・ロッセッリの提案する記憶ロクスに、ピサのカンポサントの図像が適用されていることを示した。

研究成果の概要（英文）:By focusing the analysis of the history of the Grand Duchy of Tuscany, this study was able to demonstrate convincingly how the art of memory, intellectual method to manage information, can be applied to the visual arts of the early modern age. This study showed that the art of memory has been applied in the design of the ideal garden project of Dominican friar Agostino Del Riccio and that the mnemonic “loci” proposed by Dominican friar Cosma Rosselli were based on the fresco del Campo Santo Monumentale of Pisa.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：記憶術、イタリア、初期近代、トスカーナ大公国

1. 研究開始当初の背景

初期近代の西欧社会は、新大陸の発見、自然科学の発展、宗教改革などの諸要因により、

旧来の知的枠組みが崩壊し、それらに代わる様々な知的モデルが提出され、知識を表象する方法や視覚的媒体も一挙に多彩化した時

期にあたる。これら新旧の多様な知識や情報整理の方法論を統合しようとする当時の「百科全書的」な思潮の中で、とりわけ「記憶術」とよばれる情報編集法が、当時の思想・文学のみならず、広く視覚芸術全般にも大きな影響を与えていたことが、近年の人文諸学の研究によって解明されつつある。

記憶術とは、古代修辞学において発達した一種の人為的記憶改善法であり、演説内容を暗記するために用いられた。その要諦は「場所」と「イメージ」に基づく立体的・視覚的な情報処理にあり、記憶イメージを納める仮想空間として建築が用いられたため、別名を**建築的記憶術**ともいう。この仮想空間が記憶の基盤となるため、秩序と位階性を備えた古典建築が推奨された。

近年では、記憶術が単なる暗記便法の枠を超え、初期近代の情報分類の有益なツールとしても活用された側面に光があたりつつある。

2. 研究の目的

近年の記憶術研究の大半は、テキストとイメージの通底、換言するならば、いかにして文字情報が記憶術を介して二次元図像に翻案されるのか、という点に固執している点が問題である。記憶術は仮想の建築空間に図像を配置する技巧であり、むしろ空間とイメージの通底という側面にも目を向ける必要があるのではない、片手落ちといわざるをえない。したがって本研究は、初期近代記憶術の原典資料を精読し、各著作間の理論的発展過程や影響関係を把握すること、そしてその成果に基づいて記憶術がもつ三次元的側面と視覚芸術の関連、すなわち記憶術的に構成された建築空間における知識の視覚的表象の特質を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究の基本方法は、諸所に蔵されている初

期近代記憶術文献の網羅的な書誌学的整理と、ロッセッリ『人工記憶の宝庫』およびデル・リッチョ『場景記憶術』の分析である。その具体的内容は、大きく以下の(1)~(4)に分けられる。

(1) 諸所に収蔵されている初期近代記憶術文献の書誌学的整理。近年の記憶術研究の発展にともない、関連一次文献を集約した文庫やコレクションが、各地の大学図書館やアーカイブでまとめられつつあるが、なかでも質・量ともに突出しているのが、ピサの高等師範学校の記憶術文庫である。この文庫を基盤に、可能な限りの初期近代の記憶術文献をマイクロフィルムの形で入手し、初期近代に出版された記憶術文献の総合的な書誌学的見取り図の構築を試みる。

(2) 代表的な記憶術論の内容分析を通じた、記憶理論の発展および相互影響関係の把握。記憶術論考にはさまざまなスタイルがあるが、本研究ではとくに、記憶のための建築的背景の構成、および記憶イメージの作成法に関する諸規則を論じた個所に的を絞り、その共通の特徴や差異、作者の身分や社会的属性（所属する修道会の別など）による傾向などを分析する。また、その重要性が指摘されつつも、ラテン語が壁となっていまだ本格的な分析がなされていない大部の著作に関する分析も並行して進める。主たる分析対象作品は以下である：Guglielmus Gratarolus, *De memoria reparanda, augenda conservandaque*, 1554; Lambertus Schenkel, *Gazophylacium artis memoriae* (1610); Johannes Paep, *Memoria artificialis hactenus occultata*, 1618.

(3) ロッセッリ『人工記憶の宝庫』およびデル・リッチョ『場景記憶術』の分析。

ロッセッリの記憶術著作のうち、記憶イメージ制作法を論じた後半部分 (pp. 77r-145v) を読解し、その特徴をまとめる。それと並行して、『人工記憶の宝庫』の強い影響を受けて後世に書かれた記憶術関連の著作、具体的には F. ジェズアルド『プルーツォフィア』(1592) および T. ガルゾーニ『普遍的広場』(1585) の比較分析も進める。

デル・リッチョの未刊行著作『場景記憶術』は、フィレンツェ国立中央図書館 (BNCF, Magliab. Cl. V, 9) に手稿が一点伝わる 55 ページほどの小品である。内容の十全な理解のため、まず同著作の筆写作業を行ってデジタルテキストを作成し、書誌学的な解析作業をほどこす。また前述したように、デル・リッチョの作品群は相互の参照・引用を通じて有機的な総体を形成しているため、それらの参照個所の「ロキ (場所) (loci) をすべて確定し、『場景記憶術』がデル・リッチョの

著作群のなかで占める位置を正確に把握する作業を行う。検討すべき彼の代表的著作としては、Agricoltura sperimentata e teorica (BNCF, Targioni Tozzetti, 56, I-III), Istoria delle pietre (Biblioteca Riccardiana, Ricc. 230)があげられる。

(4) 『人工記憶の宝庫』・『情景記憶術』の記憶術理論と同時代の視覚・建築芸術との関連の解明。

(3)で得た成果をもとに、同時代のトスカーナ大公国の芸術文化と記憶術の影響関係をさぐってゆく。影響関係には、直接的なものと同接的なものとが想定される。

直接的な影響関係は、両著作の中で述べられる記憶の仮想建築や、記憶イメージの例が、現実の芸術作品や建築空間を基盤としているケースである。これは『人工記憶の宝庫』ならば、地獄や天国を記憶の背景に設定する場面における、同テーマを描いた絵画群との関連。あるいは、架空の修道院が記憶の背景に設定される場面における、現実のフィレンツェの修道院建築との対応関係。また『情景記憶術』のケースでは、フィレンツェの街路や広場が記憶の背景として利用されているケースの検討や、同時代の植物園の構成が記憶の背景に活用された事例の分析等である。

記憶術と視覚芸術の間接的な影響関係の問題については、膨大な知識の分類や表象を主題とするような絵画や建築空間に着目し、それらの表現方法や空間構成の内に、(1)～()で整理した記憶術の諸規則の応用の側面をさぐってゆく。特に百科全書的な収集趣味を有していたメディチ家の歴代の君主が支配した十六世紀後半のトスカーナ大公国には、その種の事例が豊富に見つかる。具体的には、公子フランチェスコ一世がパラッツォ・ヴェッキオ内に構えた収集室「ストゥディオーロ」、彼が大公となったのちに建設させたウッフィツィ宮三階のギャラリー空間、あるいはカステッロ、ポーボリ、プラトリーノ等の大規模な装飾庭園、ピサ植物園付属の博物収集ギャラリーなどがある。

4. 研究成果

初期近代の記憶術文献に関して、豊富な蔵書量を誇るピサ高等師範学校図書館およびフィレンツェ国立中央図書館において、十七世紀以前の記憶術関連の文献を抽出し、それらの複写を可能な限り入手して、書誌学的な観点からの分析・整理を行った。本課題で特に重点的に分析を行ったのは、Thomas Lambertus Schenkelius, *Gazophylacium artis memoriae* (1610); ID., *Methodus sive declaratio in specie quo modo latina lingua sex mensium spacio doceri...* (1619); C. Valerius, *Rhetorica,*

a cura di L. Schenkel (1593); ID., *Tabulae, quibus totius dialecticae praecepta (...)* *exponentur*, 1547である。書誌学的整理ばかりではなく、内容まで踏み込んだ詳細な分析の結果、記憶術と同時代の哲学潮流(=「方法」概念)との、これまで深く掘り下げられてこなかった関連性を発見し、その成果を2011年12月にピサ高等師範学校で開催された国際シンポジウムにて発表した他、その内容をさらにブラッシュアップしたものを、2012年の立教大学におけるインテレクチュアルヒストリー国際シンポジウムにおいて発表した。なお後者の原稿は、本年度中に発行予定のシンポジウム論集に収録予定である。

十六世紀の記憶術文献とトスカーナ大公国の芸術文化との関連についての分析については、Cosma Rosselli, *Thesaurus artificiosae memoriae* (1571)の精読を行い、とくに地獄と天国の表象を記憶のロクスとして設定する箇所分析を行った。その過程で、ロッセリが用いるロクスが、同時代の地獄表象アート、とりわけピサのカンポサントに描かれたBuffalmaccoによるフレスコ画を着想源としている可能性を導き出した。その成果は『西洋美術史研究』最新号(「記憶」特集号)に論文として投稿済みである。また、史上初のミュージアム理論書として知られるSamuel von Quicchebergの著作 *Inscriptiones vel tituli theatri amplissimi* ... (1565)を記憶術の観点から分析し、16世紀の蒐集・分類理論に記憶術的な情報整理の影響があったことを説得力をもって示した。その成果は、Oxford大学出版局発行の雑誌 *Journal of the History of Collections*に掲載された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① Koji Kuwakino, “The great theatre of creative thought: The *Inscriptiones vel tituli theatri amplissimi* ... (1565) by Samuel von Quiccheberg”, *Journal of the History of Collections*, 2013; doi: 10.1093/jhc/fhs025

② 桑木野幸司 「思考の庭：知の編集空間としての初期近代イタリアの庭園」、『Arts and Media』, no. 3、2013年3月、pp. 26-46.

③ 桑木野幸司 「Ut architectura poesis—テクストの中の建築」、『Arts and Media』, no. 3、2013年3月、pp. 214-217.

④桑木野幸司「一六世紀イタリアの庭園—建築、都市、ランドスケープの観点から—」、『鹿島美術財団・第38回美術講演会講演録』、鹿島美術財団、2012年3月31日、pp. 33-91.

⑤桑木野幸司「甦ったエデン神苑—初期近代イタリアの植物園に関する考察—」、『待兼山論叢』第45号、文化動態論篇、2011年12月、pp. 67-93

〔学会発表〕(計7件)

①桑木野幸司「記憶と方法: シェンケルの『記憶術の宝庫』(1610年)における叡智の家について」、「人知の営みを歴史に記す 中世・初期近代インテレクチュアルヒストリーの挑戦」、2012年7月7日、立教大学

②桑木野幸司「思考の庭: 情報処理空間としての初期近代イタリアの庭園」、大阪大学文学研究科・研究教育フォーラム、2012年11月15日

③桑木野幸司「庭の掟 (Lex hortorum) —初期近代イタリア庭園の公開性について—」、文学部共同研究「ヨーロッパ文化としてのグランドツアー」研究発表会、2013年3月5日、北海学園大学

④桑木野幸司「ムネモシュネの宴: 初期近代イタリアの文芸・視覚芸術におけるテキストとイメージの通底」、エクフランス研究会: 古典学と美(術史)学の間、大阪大学会館、2013年3月23日、主催: 科学研究費補助金基盤研究(C)「弁論術から美学へ—美学成立における古代弁論術の影響」(研究代表者: 渡辺浩司)

⑤ Koji Kuwakino, “Memorizzare con metodo: ‘domus sapientiae’ nel Lambertus Thomas Schenkelius, *Gazophylacium artis memoriae* (1610)”, Convegno internazionale: Arti e pratiche della memoria, Pisa, Scuola Normale Superiore, Venerdì 16 Dicembre 2011.

⑥桑木野幸司「ヴァザーリと庭園」、シンポジウム「ヴァザーリとイタリア・ルネサンスの芸術」、京都大学総合博物館、12月10日。

⑦桑木野幸司「ヴァザーリと庭園」、国際シンポジウム「ウフィツィと宮廷建築家ジョルジョ・ヴァザーリ」、イタリア文化会館(東

京)、2011年9月27日。

〔図書〕(計5件)

①ジョン・カナリー著、桑木野幸司訳、『古代ローマの肖像: ルネサンスの古銭収集と芸術文化』、白水社、2012年6月10日

②桑木野幸司「(ルネッサンス)理想都市」、日伊協会(監修)・イタリア文化辞典編集委員会(編)、『イタリア文化事典』、丸善出版、2011年12月、pp. 70-71

③桑木野幸司「ヴィラと庭園—古代とルネサンス」、同上、pp. 294-295

④アンドレア・パラディオ著; ヴォーン・ハート、ピーター・ヒックス編; 桑木野幸司訳『パラディオのローマ: 古代遺跡・教会案内』、白水社、2011年11月。

⑤桑木野幸司「第4章: 庭園設計家ヴァザーリ」、野口昌夫編集『ルネサンスの演出家ヴァザーリ』、白水社、2011年(5月)、pp. 202-269.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑木野 幸司 (KUWAKINO KOJI)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号: 30609441

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし